昭和51年2月5日第3種郵便物認可　平成2年5月25日印刷平成2年6月1日発行(毎月1回1日発行)通巻第173号

月刊剣道日本

1990 6

the KENDO·NiPPON monthly

もっとも古く正確に伝わった古流武術の奥儀に迫る

特集 天真正伝香取神道流

対談◉話題に迫る

子どもの少ない現代の少年剣士育成法(前編)

タイプ別攻略の実戦論

田村徹教士七段

居合道九段へのみちのり

紙本栄一

高校訪問記

福島県立福島高等学校

聞き書き剣道史

堀口清範士九段

海はるかなり——幻の剣士・森寅雄の生涯

教育塾・野間道場

第38回全日本都道府県対抗剣道優勝大会

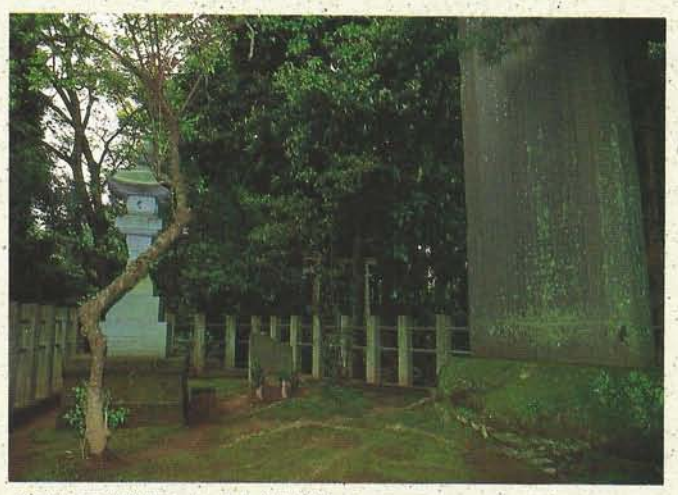
特集

天真正伝香取神道流

構成◎本誌編集部
撮影◎岩井正明

流祖の生誕以来、
なんと六百余年かたち、
しかも剣術、
居合などにとどまらず、
多くの武技と根本原理を現代に伝えている香取神道流。
防具着用の竹刀剣道の流れが、
百数十年のあいだに大きく変化したことを考えると、
当流の教えのなんと正確で普遍的なことか。
伝承の奇跡は、
なんに当流が武のメッカに生まれ育ったからだけではない。
教えや歴史をたどるうちに、
本来の武道が説く理想も見えてくるのである。

流祖・飯篠長威斎家直が使用した軍扇。七つの星からなる〝破軍星〟と十二支は、さすがに色褪せている（飯篠快貞氏蔵）



香取神宮の旧参道わきにたたずむ流祖の墓。左手は流祖生誕六百年記念の燈籠

当流の伝書。簡略な記述や単純な蜻蛉絵（とんぼえ＝形を表わした図）は、かえって流儀の確かさを示すものだ（飯篠快貞氏蔵）

特集◎天真正伝香取神道流

奇跡の流儀

加来耕三

近世剣法の始祖・飯篠長威斉

香取神道流は、かつては天真正伝神道流、神慮神道流、新当流などと呼ばれ、江戸末期には神刀流とも称されてきた道統である。

開祖・飯篠伊賀守家直（号して長威斉）によって、室町後期に興った兵法で、家直六十余歳のおり香取大神の神慮により、「兵法神書」一巻を得て開眼、天真正伝神道流を創始したと伝えられている。

家直は南北朝末期の元中四年（一三八七）、下総国香取郡飯篠村に生まれ、長享二年（一四八八）四月、百二歳の高齢で没するまで、門下に上泉伊勢守、塚原土佐守および卜伝、松本備前守、諸岡一羽など著名な剣士多数を擁したことはよく知られるところだ。

これらの門弟が、あるいはその人たちを師として後に新陰流、卜伝流、有馬流、一羽流の開祖となり兵法の隆盛をみたが、こうしたことが今もって家直を〝近世剣法の始祖〟と称賛せしめるゆえんでもあろう。

この家直により創始された香取神道流は、太刀（剣）術、居合術をはじめ槍術、棒術、薙刀術、柔術から忍術、築城術にいたるまで、いうところの武芸十八般を具備し、その大半は現在なお連綿と伝承されている。

「物質文明中心の今日に、古武道精神の伝承、とくに文化財としての古武道を、民族の文化遺産として後世に伝えねばならない」

現宗家・二十世飯篠快貞（修理亮）氏は、このように述べている。昭和三十五年四月、わが国で初めて武道の文化財となった香取神道流には、歴史的にも剣を通しての〝人間形成〟が実践されている。その特色たるや〝密教〟と深く結びつき、わけても〝陰陽五行の原理〟にもとづいた「兵法秘術」の展開には驚嘆すべきものが窺える。

以下に、それら香取神道流の概略を記してみたい。

流祖・飯篠長威斉家直公

総合武術の伝承

香取神道流が重視することのひとつに〝人間形成〟のあることは先にも述べた。

当流師範の大竹利典氏は、こう語る。

「昔からわが流儀は、〝兵法は平法なり、男子為る者、平法を知らずしてあるべからず〟の精神のもとに修業を重ねてきました。この文言は当流目録の巻頭にもあります。入門したからには終始一貫、一撃必殺の稽古に励みます。武は強靭でなければならないからです。だが、同時に求められていることで、わが流でなにもまして重要なのは、人格の形成と武の精神を体得することなのです」

香取神道流では、武は己を守り郷土を護るための戦いの手段と位置づけながら、これを繰り返し修練することで、おのずと正しい心が培われ、百錬千錬の末に兵法すなわち平法の意を体得できるとしてきた。

だから、当流では試合というものを堅く禁じている。

現宗家・二十世飯篠修理亮快貞氏

防具類は一切身につけず、竹刀すら用いぬ木剣での実戦的稽古法だから、仕合えばいずれかの生命が、必ず損われるであろうことを忌避してきたからである。

香取神道流では、試合は〝死に合い〟とされてきたが、こうした教えも武の道をもって〝人格〟を涵養しようとすれば、当然の事柄であったのかもしれない。

それはまた、極意皆伝の伝達にしても、武技にのみ錬達していればよいというものでなく、少なくとも齢四十二を超えねば与えられない一事をもってしても、武技の錬成と人格涵養がつねにイコールでとらえられてきたことがわかる。

当流の剣は、およそ「表之太刀」四ヵ条、「五行之太刀」五ヵ条、「極意七条之太刀」三ヵ条、「両刀」四ヵ条に「極意小太刀」三ヵ条といわれ、加えて「居合術」が六ヵ条、「立合抜刀術」五ヵ条がある。

さらに極意の居合術が五ヵ条とあるので、剣以外の棒術、柔術、手裏剣術などの武技まで数えると、その修業には相当年数を要する。ゆえに当流を学ぼうとする者には、厳しい制約も定められていて、入門にあたっては誓書に血判を捺させて、はじめてこれを許可するやり方は今もって変わらないという。

誓書である「敬白神文之証」には、次のように記されている。

一、香取大神御伝法ノ天真正伝神道流ヘ入門致スニ於テハ親子兄弟同門タリトモ猥リニ他見他言致ス間敷候事

一、口論亦ハ他人ニ対シ兵法ヲ働キ無礼ノ行ヒ致ス間敷候事

一、諸勝負事ハ勿論其他悪敷場所ヘ立チ寄リ致ス間敷候事

一、免許無之時ハ他流試合致ス間敷候事

右之条々堅ク相守リ可申候若シ背クニ於テハ香取大神敵一倍大神ノ御神罰ヲ蒙ル可キモノ也　依テ神文証如件

師範・大竹利典氏

密教による人格涵養

ところで香取神道流に「水月見様のこと」「北斗の目付け」などの秘伝のあることを知る人は案外少ない。

剣の教えに〝音なきを聴き、姿なきを観る〟とあり、これを〝心眼を開く〟という。これらの教えは他流においても、よく説かれるところだが、当流がこれと並行して、修業の中核に据えてきたのが密教との繋がりであろう。先の心眼を会得するにも、これら密教による精神修養が根幹をなしているようだ。

さらに剣には心眼とともに、〝不動心〟なるものが要求される。剣における不動心とは、技は相手を一撃のもとに倒すに専念するものの、それはあくまで一技術の行使でしかなく、本来の精神はあくなき平和への固守、すなわち平法、活法でなければならない。

香取神道流における不動心は、仏教のなかの不動心の真理に学び、大日如来の自性輪身、正法輪身、教令輪身をもって不動心とする。周知のごとく大日如来は、不動明王の姿をもって勧善懲悪とともに、衆生を救済する仏陀の心を心とし、慈悲堅固にして、ものごとに動じることがない。

もうひとつ、密教に関わる当流の法術、つまり秘伝を簡略に紹介しておこう。

五行相生

陰陽五行説による五行相生とは、「木は火を生じ火は土を生じ、土は金を生ず」の関係をいい、さらに詳説すれば次のようになる。

〔木生火〕　木は燃えて火となり、木と木が擦り合わされて火となる。

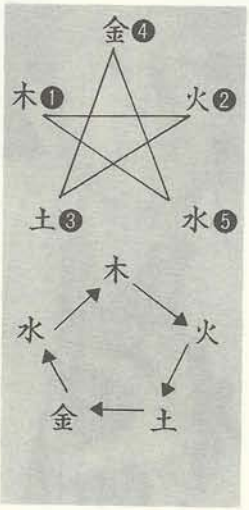
〔火生土〕　火は燃えてはじめて姿があり、あとには必ず灰が残る。灰すなわち土。

〔土生金〕　土が集まって山を成し、その山から金属が産出される関係。

〔金生水〕　金属は鷹蝕して水にかえり、溶融すれば液体（水）を生ず。

〔水生木〕　水を養分として木が生育する。

よく〝相性がよい〟というが、それは〝相生〟のことをいい、この五行の関係を表わしたのが次の図であり、この順序を木・火・土・金・水とよび、その順序にあれば〝相互に助け合う〟よい関係にあるとするのが五行相生である。



(注)上図は香取神道流「五行の陣法」から

五行相剋

これは五行が木・土・水・火・金の順序にあれば、相互に殺戮し合うというほどの悪い関係にあるといわれる。

かつて武士が己の刀、鐔、槍などに〝九字〟あるいは〝十字〟を刀の中心に刻印したのはよく知られるところ。これは、武士たちが己の願望成就、または武士としての不覚の無きよう、神仏の念力を得て目的を遂げようとした精神的な兵法でもあった。

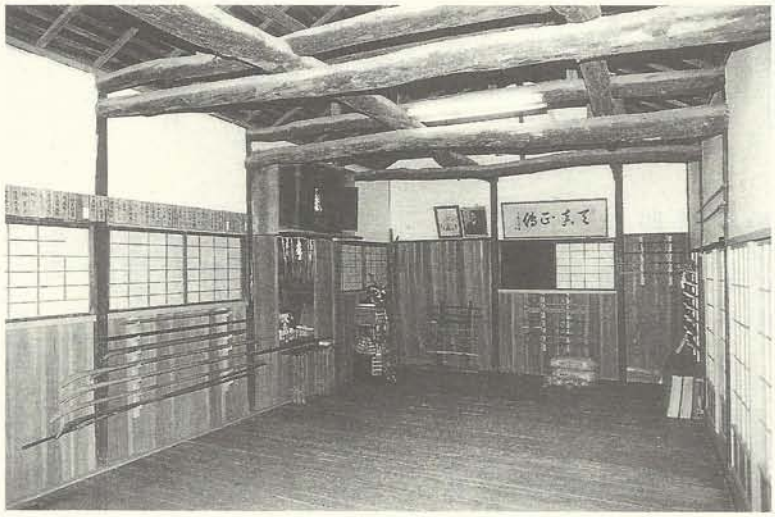
古くは〝八幡大菩薩〟の旗指物を背に、各自の信ずる神仏の加護を祈って戦場に出たのも同様であろう。生と死の極限にあればこそ、百錬の武技と強靭な精神とが相まって、最良の結果となるのはいうまでもない。ここに兵法が不動心とともに、安心立命の境地を開発する要があった。

香取神道流が秘伝とする法術は、弘法大師の真言密教による呪法、すなわち九字の大事によって〝印〟をむすび精神統一をして無我の境地に入る修行であった。九字の大事とは、臨、兵、闘、者、皆、陣、烈、在、前をいう。

臨……宝瓶之印　兵……金輪之印
闘……外獅子之印　者……内獅子之印
皆……外縛之印　陣……内縛之印
烈……知剣之印　在……日輪之印
前……陰形之印

以上の印をむすび、呪文を唱えることで精神統一をはかるのだが、非常に困難かつ厳しい修業といわれている。

▶飯篠家が代々祀ってきた軍神・摩利支天尊



▼現宗家宅にある当流道場。流祖の時代以降、道場は二度移転し、現道場は二百五十年の歴史を誇る

陰陽五行と軍配兵法

当流はそのほかにも「陰陽」「五行相生・相剋」の理とも深くむすびつき、武技に対する法術を広く展開している。兵法であるかぎり剣、槍、などの技術もさることながら、用兵の妙をも数えるのはいうまでもないが、なかでも香取神道流では、〝軍配兵法〟を最も機密の秘法として伝えてきた。

戦団の進退、攻防に対するすべての動静を司る軍配とその兵法は、同時に戦陣の帰趨を決する重要事。それだけに同法には多くの口伝があり、ここに巨細を記すべくもないが、これとて四十二歳を超えないと伝授されないというから、きわめて伝えられることも少ないのであろう。

ついでながら、この四十二歳という年齢数は、いわれるところの厄数の意ではなく、陰の数六と陽の数七を乗じた数で陰陽和合の数とか。このように香取神道流には、個の技を磨く武術とともに、呪術をはじめとする法術と称される技法も多い。これらを当流では〝遁甲〟とも呼んでいる。

特筆すべきひとつは「陰陽五行」の原理にもとづく陣法であろうか。

いうまでもなく陰陽五行は、「陰陽説」と「五行説」からなる。世の事象のすべてが個の独立で存在するのではなく、陰と陽の対立のなかに世界ができあがっているとする陰陽説は、明暗、天地、火水、表裏、剛柔、吉凶、などの一対で成立しているとする。

他方、五行説は斉国の鄒衍が説いた。

「天地のはじめ、渾沌としたなかで、明るく軽い気が

〔木剋土〕　木が育つには土を割って芽が出、根の発育のための侵略を土壌は許してしまう。
〔土剋水〕　水は流動し、地形どおりに自由に形づくられてしまうものである。
〔水剋火〕　水は火を消す。
〔火剋金〕　堅い金属も火によって流動体となり自由にできる。
〔金剋木〕　木はすべて金属（工具）によって自在に変化が可能である。

香取神道流　五行の陣法

五気	木	火	土	金	水
五方	東(震)	南(離)	中央	西(兌)	北(坎)
五色	青	赤	黄	白	黒
気節	春	夏	中央	秋	冬
四神	青龍	朱雀	中央	白虎	玄武

陽の気をつくり火となる。暗く重い気は陰の気をつくり水となる。天上では火は太陽となり、水は月となり、これが組み合わされて五つの惑星となる。地上では火と水から五原素ができる」

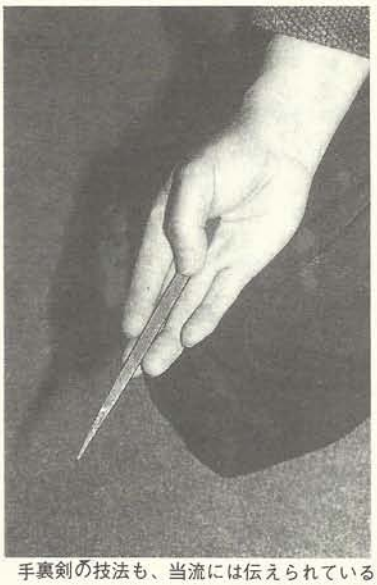
つまり、万物は木火土金水の五行からなり、その消長と結合、循環によって森羅万象となる。

この陰陽と五行をもって万物に当てるのが「陰陽五行」だが、香取神道流の〝五行の陣法〟は、まさしくこれをもって「五行の相生」(五気の親子関係)「五行の相剋」(五気の勝ち負け)を明らかにし、築城や陣地構築に重要な役割を果たしてきた。

「五行相生」の関係は、〝木火土金水〟の順序にあれば、〝相互に助け合う〟よい関係となる。が、それに反して〝水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、土は水に勝つ〟関係を「五行相剋」という。〝剋〟には〝刻む〟の意があり、それには〝害う〟との意味も備わっていたため、いつしか〝害う〟＝〝殺す〟との意にまで発展したから、これを五気の勝ち負けとしたのであろうことは容易にうなずける。

六百有余年の命脈

香取神道流にはこれらのほかにも、「九星学」にもとづく気術、「十二支、八干」による方術といった遁甲もあり、陰陽の消長や五行の生剋、二十四節気の移動によって、人事や自然の現象を判断し、あるいは築城の場合などにおける土地環境の選定に供する術、などなど多彩であるが、ここでは割愛して紹介のみにとどめておきたい。


手裏剣の技法も、当流には伝えられている

それにしても驚くべきは、この香取神道流が、じつに六百有余年もの命脈を保持し、伝承されてきている事実であろう。

宗家の系譜によれば、開祖・家直から若狭守盛近、同盛信、山城守盛綱、左衛門尉盛秀、大炊頭盛繁、そして七代からはそれぞれが修理亮を襲名して、盛信、盛長、盛久、盛定、盛重、盛次、盛清、長照、盛重、盛房、盛貞、金次郎とつづき二十代快貞にいたっているのである。

消長の激しかった斯界で、かくも永きにわたった正確な道統は多くはないであろう。が、それにもまた、他流には見られないこの流の特異さがあったからともいえる。

まずは、飯篠家には代々、

「嫡男は大名家に仕官せず」

という不文律があったのである。

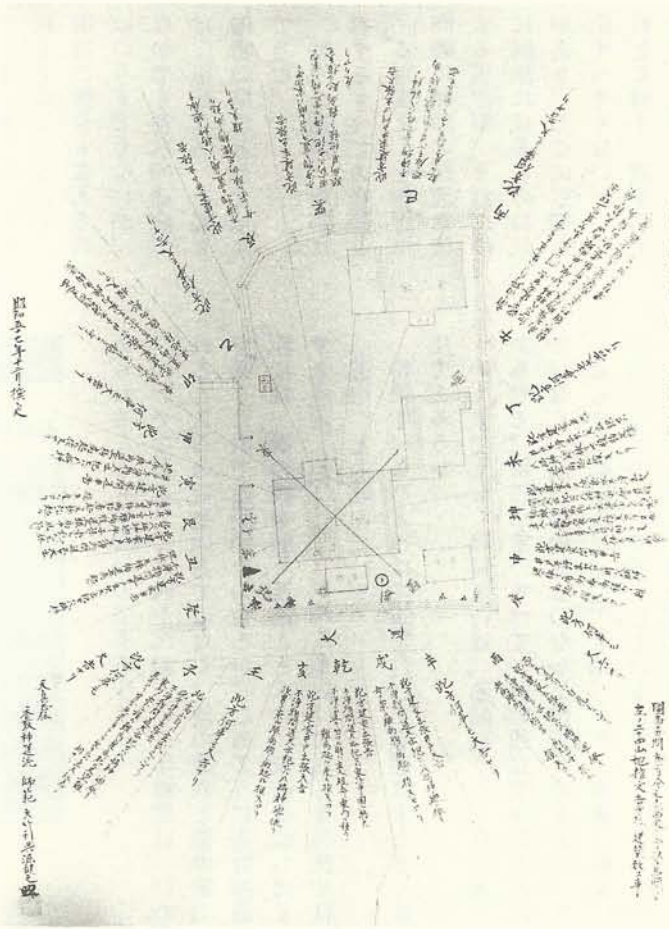
二代盛近以後の歴代宗家は、剣の道に生涯を賭すを旨とし、諸国の大名家からいかなる地位、高禄をもって迎えられようとも、これを受けずに剣の修業一途に励んできた。

香取神道流は兵法を平法とし、剣技と人間形成に取り組み、それでいて剣をもって争うことをタブーとしてきたのである。もし、大名家に仕官をしていれば、ときには主命によって他人と戦わねばならない場合も、永い歳月のなかではあったにちがいない。

争いが当流のご法度であるばかりか、争えば一命すら危くしたであろうことはいうまでもあるまい。かつて好戦の士があたら生命を絶ったばかりか、道統の尽きた例は枚挙にいとまがないくらいだ。

「香取神道流がいまなお、その兵法を正確に伝え得るのは、一つは秘伝であったこと、二つには宗家の仕官の禁止でした。この二つの戒めの根底にある〝兵法は平法なり〟の教えこそ、天地自然の運行に則り体系づけられた兵法を、単に争いや戦さの具とすることなく、〝人は人としての、穏やかな一生〟をおくるべきであり、そのための兵法鍛錬と考えられてきたからでしょう」

大竹利典師範は、このように語る。まさに兵法の真随ともいうべき言ではある。


大竹師範の自宅も、当流に伝わる気術(方位学)に則り設計されている

抜附之剣（ぬきつけのけん）

「表居合」六カ条より

香取神道流の居合術は、姿勢を意識して低く構えるところに特徴がある。

〝居合腰〟ということば自体、居合の形そのものが室内や暗い場所など、不意に切りかかられた場合、場面を想定して創られたからにほかならない。

しかし形とはいえ、居合の真骨頂は〝速さ〟にある。敵より何十分の一、何百分の一の差で技き付けることで、生死が分かれるからだ。

兵法を平法と定め、できる限り抜かないこと、使わないことを前提としながらも、それでもなお不測の事態に立ちいたったならば、〝祈りの心〟を胸に徹頭徹尾、勝ちを制するのである。

抜き付け前の居合腰では、姿勢を低くすればその分だけ、高い位置の物が透けて見える道理である。敵の動きをいち早く把握するのが第一というわけだ。

また、抜刀直前の態勢でも鯉口を握る左手は、表紙の写真にあるように親指と人差指を広げて鍔にかける。こうしておけば、親指で鍔を押して鯉口を切るとき、誤って指の腹を切るなどという失態はあり得ず、敵に柄頭を取られても、そう簡単に抜けるものではない。

抜き付けの際、右手を柄にかける前、一瞬手の平を上にして柄の中ほどに移す。これは衣類の袖を肘のほうへ落とすための動作であり、柄と手との折り合いをつける意味もあろう。

さて「抜附之剣」は抜刀するなり真上に跳び上がり、刀の刃を水平にして敵を片手切りにし、着地する。

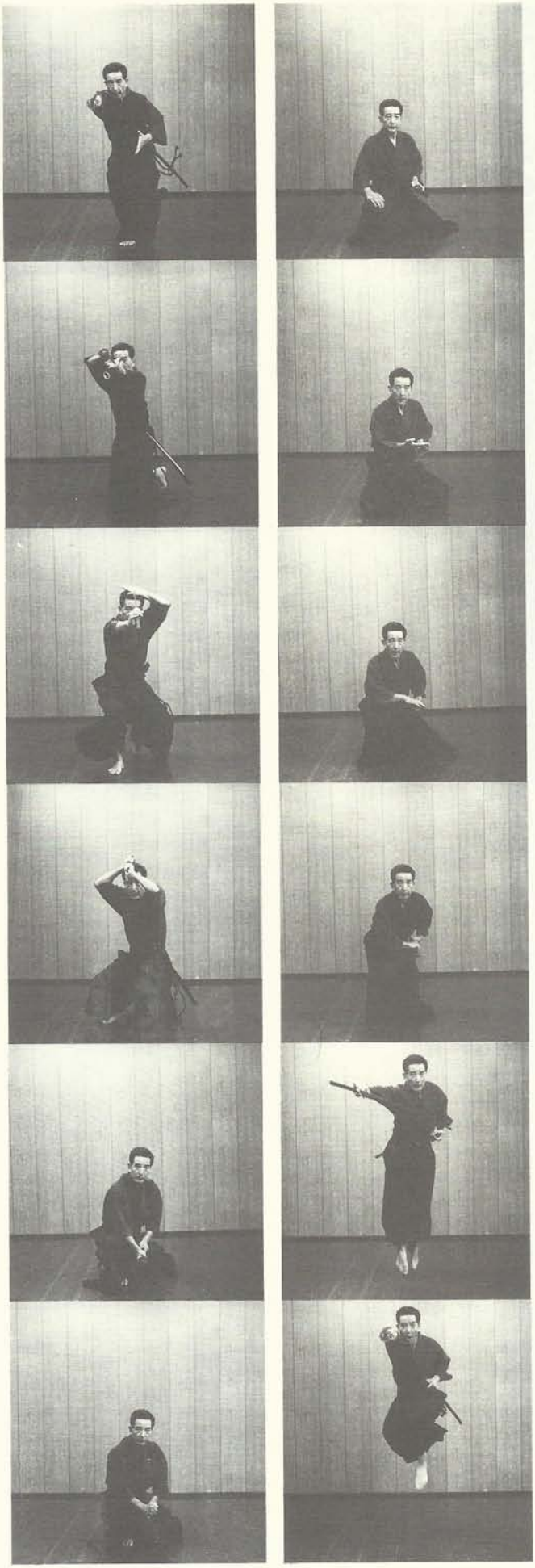
「当流では、刀は体の延長として考えます。片手討ちは五寸の得あり、という教えもあり、左右いずれにも太刀を自在に使いこなせるようにならねばなりません。また〝抜附之剣〟で抜き付けたとき、柄頭が手首の下に隠れて腕と刀が一本の状態になりますが、こうすれば上から刀をたたかれても、落とされることは、まずありません」

（大竹師範・談）

片手切りから刀の峰に左手を添え、頭上にかざすように構え、直後に左手は隙なく峰をすべりながら柄の定位置にもどる。と同時に切り下ろすのだが、香取神道流は甲冑を使った時代に成立した流儀であるために（兜の前立てが邪魔になることもあり）、刀を振り下ろす太刀筋にはやや角度がついている。これを〝巻き打ち〟という。

充分に切り下げたあと、右手の中指、薬指、小指で柄をひっかけるように軽く刀を一回転させ、そのまま右拳で柄を軽くたたいて独特の血振りを行なう。このあと右手を逆手に持ち替えて納刀。目付けは正面を見たままで残心を示す。

ちなみに納刀では、現代居合のように切先を鯉口に納めるときだけ速くするというようなことはせず、納刀は静かにゆっくりと行なう。刀を鞘に納めるのは、完全に勝負がついてからのことだからだ。



五津之太刀（いつつのたち）

「表之太刀」四カ条より

双方、〝清眼（晴眼）の構え〟をとる（①）。肩や肘の力を抜き、切先は相手の顔面につけ、左手は柄頭いっぱいに握り、そのとき小指に少し力を入れるが、握りはあくまでも軽い。

敵（左）は〝陰の構え〟に直し（②～③）、一気に勝敗を決しようと構えをととのえる。

此方は〝清眼〟から〝陽の構え〟にて二振り〝大巴〟に切る（③～⑥）。〝陽の構え〟は太刀の切先が目線の位置から頭上へと移っているところが特徴であり、つぎの〝大巴〟に移る一過程であるとともに、瞬時に臨機応変の対処ができるように工夫された太刀である。〝大巴〟は間合をはずし、相手の打ち気をくじき、此方の勇気を鼓舞して精神を集中する意味がある。振りかぶるときに太刀をかつぐようにするのは、兜をつけた場合に前立てや鍬形をさけるためである。

二度目の〝大巴〟で、敵は此方の打ち気を察すると、〝陰の構え〟を崩さぬように後退し、後の先を取ろうとする。

一方、此方は〝大巴〟を切った勢いに乗じ、左足より二歩前に進んで敵を突く（⑥～⑧）。

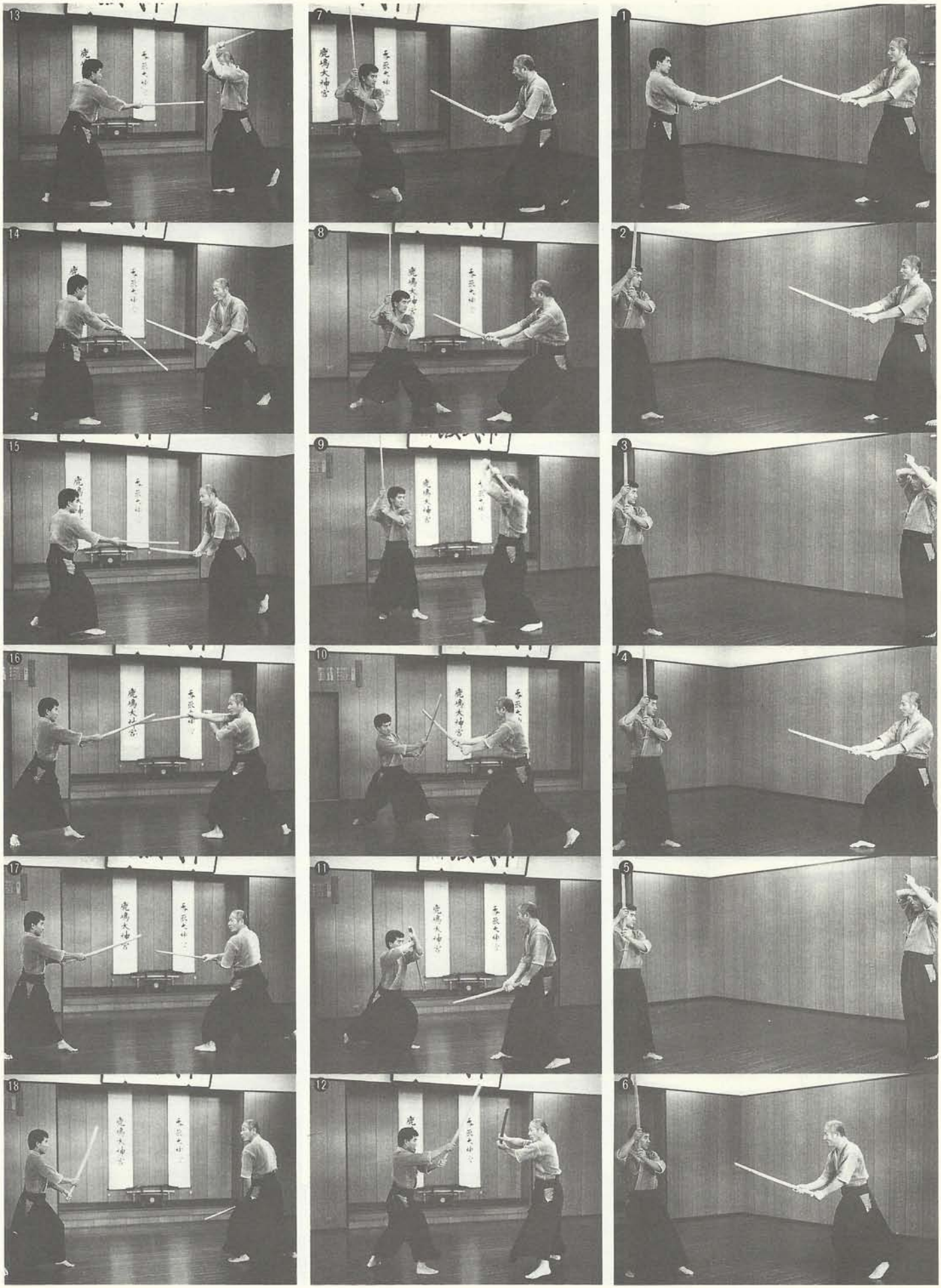
敵は身を引いた位置から〝巻き打ちの上段〟で真っ向から切り付ける（⑨～⑩）。それを此方は迎え撃ち、さらに太刀を払いよけて、打ちにくる相手の太刃筋を、右足を開いて〝小霞〟に受ける（⑩～⑫）。

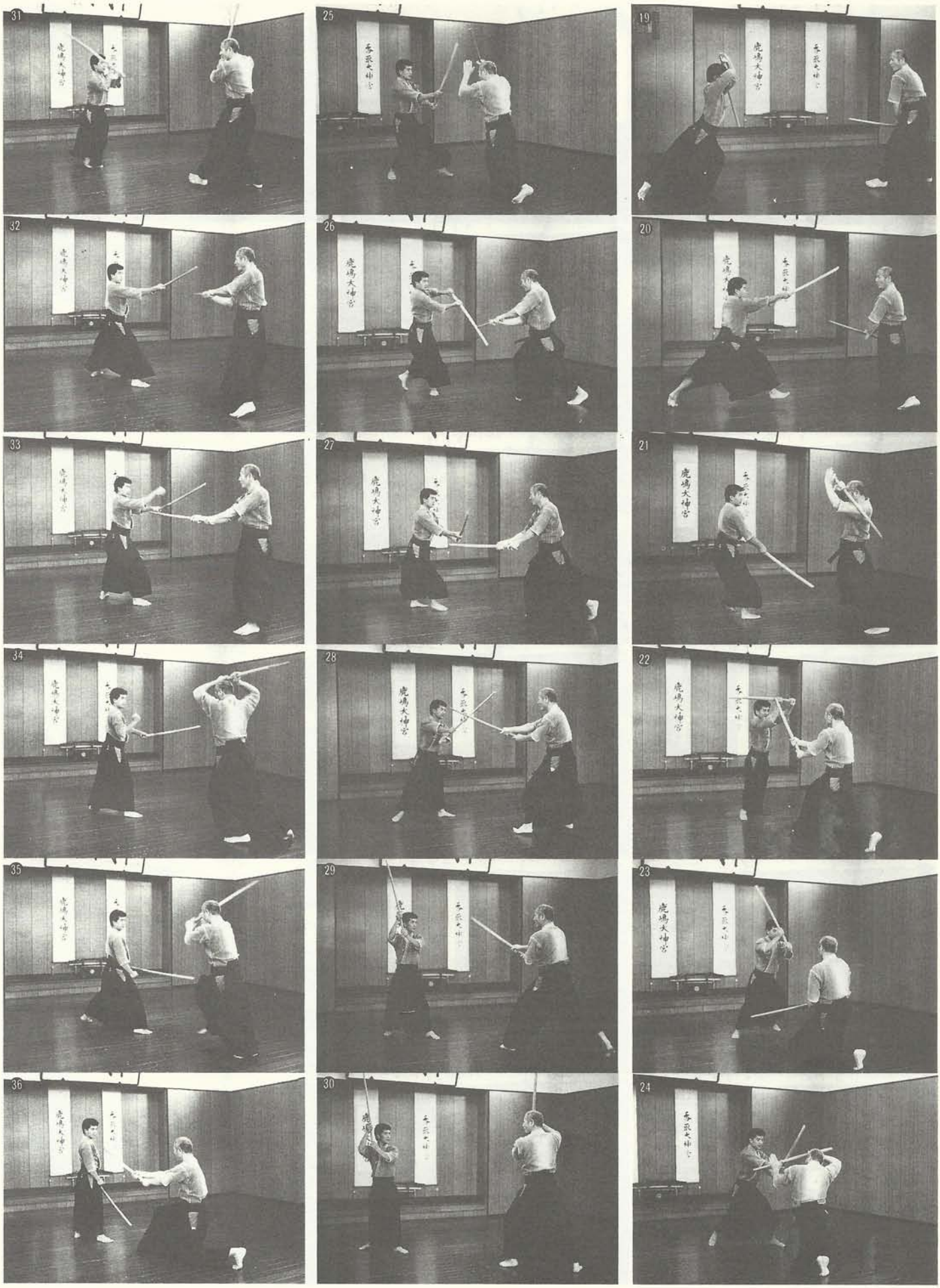
この場合に大切なことは、敵の太刀の延長線上に決して体を残さないことである。剣術が斬ること、生死を分かつことであった真剣勝負ならではの体捌きといえよう。

つづいて打ちにくる敵の太刀に対して、此方はそれを受けつつ、下段に太刀を構え（⑬～⑮）、〝陰〟に引こうとする敵に〝大霞〟で体を捌き、そのまま突いて出ると、敵はさらにそれを頭上から打ち落とす（⑯）。

此方は逆下段に引いて、待ちの態勢をつくる（⑰～⑱）。

再び敵が打ちかかってくるところを、此方は今度は〝小霞〟に抜け、敵の真正面へ切りかかる（⑲～㉒）。敵はそれを受け、そのまま振りかぶって上段から切り下ろすところを、此方は姿勢をできる限り低くして〝鳥居〟に受け流す（㉒～㉔）。さらに下段腰へと切り付ける（㉕～㉖）。敵は太刀を引いて下段に太刀が合わさると、此方は左足を踏み込みながら敵の首を切り上げる（㉖～㉘）。互いに〝陰〟に引き（㉙～㉚）、敵が首を切りにきたところを（㉛～㉜）、〝手裏剣〟（㉝）にて左袈裟に切り付ける（㉞～㊱）。そして残心を示す。


13
7
1
14
8
2
15
9
3
16
10
4
17
11
5
18
12
6


31
25
19
32
26
20
33
27
21
34
28
22
35
29
23
36
30
24

初公開・五津之太刀崩し（隠し技）

口伝

香取神道流の形は一見しただけでは真意は分かりにくい。というのも、他流にくらべて一本の形の中に組み込まれた太刀数が圧倒的に多く、すばやいために、ただ互いに太刀を合わせているように見えるからだ。「真剣勝負の場合、あんなに多く打っては刃こぼれがする」とか「双方、受けてばかりで決め技がない」と思ってしまう人が古流関係者にもいるのだそうだ。

もちろん真剣勝負であれば、初太刀か二の太刀で勝負は決するにちがいない。剣は本来、一撃必殺である。

しかし、香取神道流の場合、たとえば打ってくる相手に対する下段からの突きを省略して見せなかったり、打ち込むべきときに相手の木刀をたたいたりすることがよくある。つまり他から技を盗まれないようにするため、打ち合いの流れの中で、意識的にそれと分からないようにしたのであった。これは太刀の形に限らずいえることだ。

この一般の目には映らない部分は〝崩し〟と呼ばれ、入門後数年を経た者にのみ伝授されたものである。「五津之太刀」を一例として、大竹師範に解説していただいた。省略部分を中心に紹介するが、本来の形の連続写真と比較していただきたい。

切込み（右）が二歩進んで相手の左小手を押さえつつ胸を突く（①～③）。

受太刀が引くので、**切込み**は真っ向から打ち込むが、**受太刀**はかわして相手の左首を切ることもできる（④～⑤＝ここは、形の稽古では受けている）。また、受けてから腿を切ることも可能だ（⑥～⑦）。

受太刀が打ってきたときは、**切込み**は下段から胴にいくのが最も無駄がない（⑧～⑨＝形では受けている）。ここで**切込み**が受ければ、**受太刀**は太刀を返して逆に胴を打てる（⑩～⑬）。

しかし、**切込み**は左足を引いてかわし、小手を打つことも考えられる（⑭～⑮）。

形の稽古では、このあと**切込み**が下段をとるが、そこからすかさず**受太刀**の左小手を切り上げることができる（⑯～⑰）。

〝大霞〟の**切込み**に対して、**受太刀**は上段から右小手を狙える（⑱～⑲＝形では、たたいている）。

切込みが逆の下段に引いたところを、**受太刀**は大きく踏み込んで正面を打つが、**切込み**にとってここからの効果的な技としては、体をかわして片手突きすることである（⑳～㉒）。あるいは、大きく体を開きつつ振りかぶり、左から面に打ち込むこともできよう（㉓～㉖）。

受太刀が大きく正面に打ち込むと、形の上で**切込み**は〝小霞〟に抜け、直後に真っ向から切り下ろして膝を地につけるが（㉗～㉙）、ここからは転んだ状態を想定したものである。

ここで**切込み**は相手の足を切っているが、**受太刀**は足を引いて（㉙）**切込み**の頭上に太刀を振り下ろしてきた。そこをすかさず**切込み**は太刀を〝鳥居〟にかざして**受太刀**の腹に突き込む（㉚＝形では受けている）。相手の正面打ちをそのまま受けるとすれば、そこから立ち上がりつつ、左手を添えた太刀をそのまま右に返し、柄頭で相手の横面を打つことができる（㉛～㉞）。また相手の左胴に転じることもできる（㉟～㊱）。

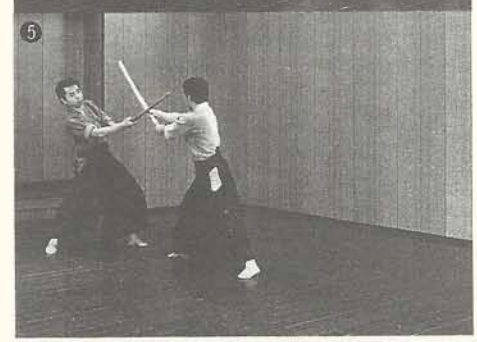
が、この瞬間、**受太刀**が**切込み**の小手を制すかもしれない（㊲）。

切込みが〝下段腰〟を狙い**受太刀**がこれを下段で受けたあとは、**切込み**が右足を踏み込んで相手の首を切るところが省略されている（㊳～㊴）。

受太刀は、ここを一歩引けば体勢を変えられる（㊵）。

互いに〝陰〟に構え合ったあと、**受太刀**は相手の首を切る（㊶～㊷）。しかし、**切込み**は小手を切る（㊸）。この状態で相突きとなるが、**切込み**は相手の太刀を胸前ではじいて袈裟に切り込む（㊹～㊻）。

稽古における形には、以上のような裏付けがなされてる。つねに、一方が切られればもう一方が切り返すという具合に、交互にその場を制する者が、臨機応変に入れ替わっていくところも、大きな特徴であろう。

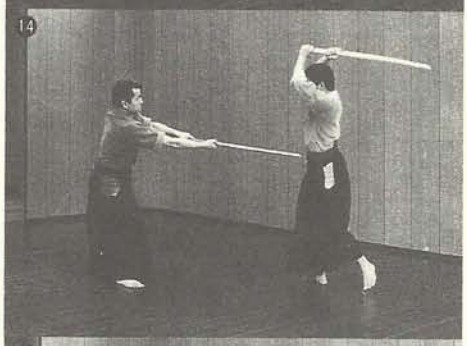


⑲ 香取大神宮

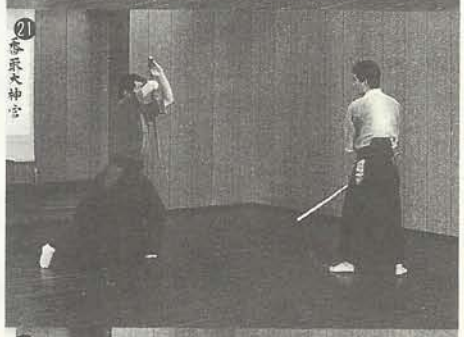
13

❼ 香取大神宮

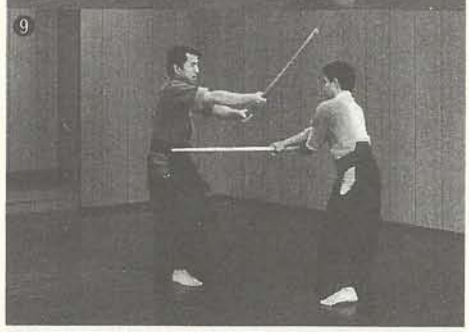
⑳ 香取大神宮

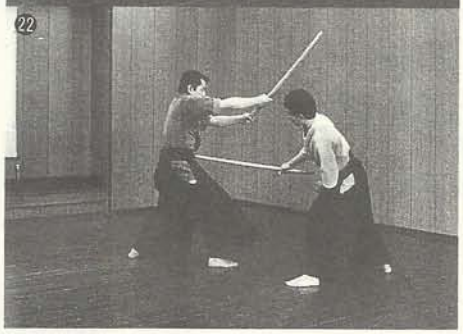

14

❽


㉑ 香取大神宮

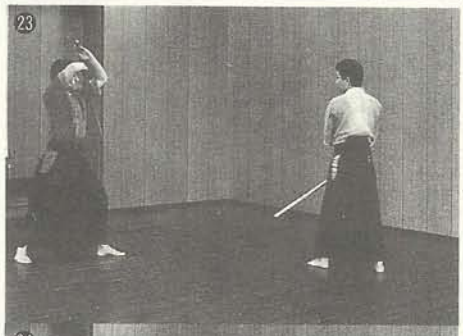
15


❾


㉒

16

❿

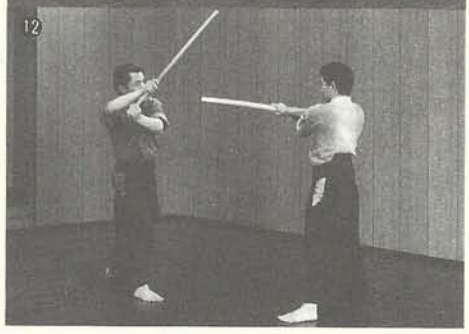

㉓

17

⓫

㉔

⓲ 香取大神宮


⓬

37

31

25

38

32

26

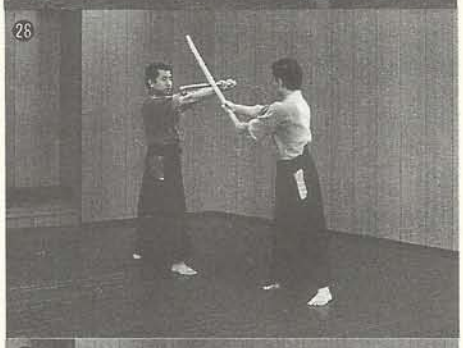
39

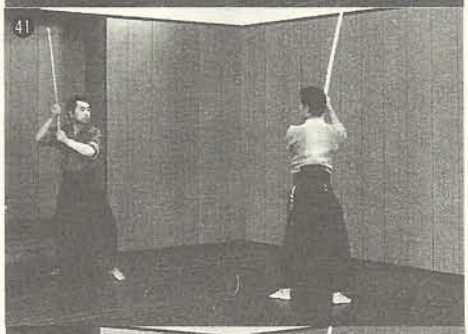
33

27

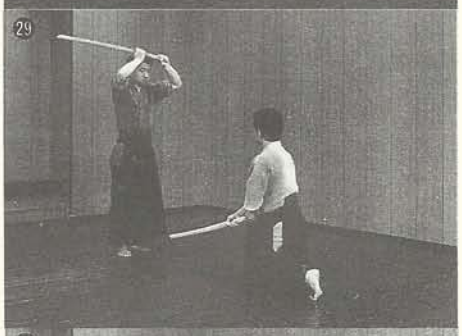
40

34


28


41

35


29

42

36

30

迫合之棒（せりあいのぼう）

「棒術」表六カ条より

香取神道流の棒術は、〝待ち〟が主になっている。〝後の先〟を取るということである。

まず構えは〝陽の構え〟（⑤）を固めて敵（太刀）の出方をうかがう。

敵は〝捨の構え〟（⑦）や上段（⑧）に太刀を定めるが、それでも踏み込めず、間合をはかりながら機をうかがい、正面に打ち込んでくるところを、此方は下からすくうようにして〝清眼〟に受け止め（⑩～⑪）、手の内を返しつつ棒を返し、相手の構えが定まらぬうちに横面に打ち込んでいく（⑫～⑬）。

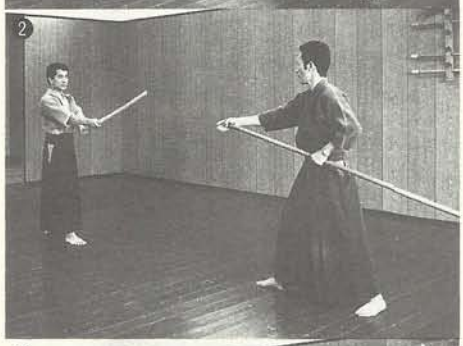
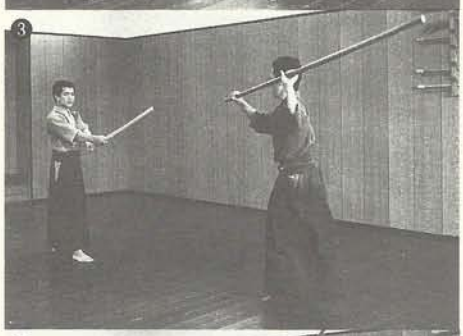
敵はそれを受け止め、此方の出方をうかがうが、此方は棒をすばやく返して下段にとり、金骨（睾丸）を跳ね上げるべく跳び上がる（⑭～⑯）。

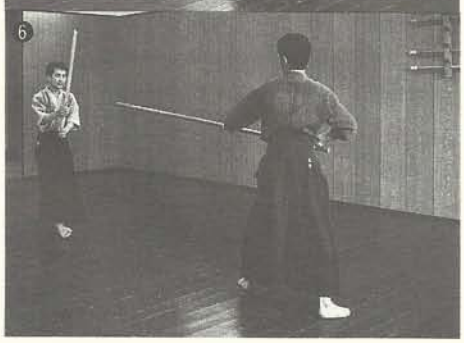
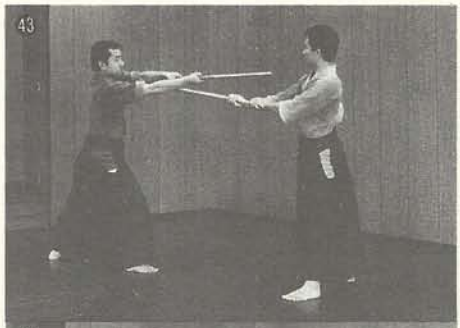
敵が左からこれを払いよけ、低い姿勢をとり、〝大巴〟を一振り切って此方の眉間に打ち込んでくるところを、此方は右に体を開き、下段から左肩を回すようにして棒を旋回して敵の攻撃を受け止める（⑯～⑲）。

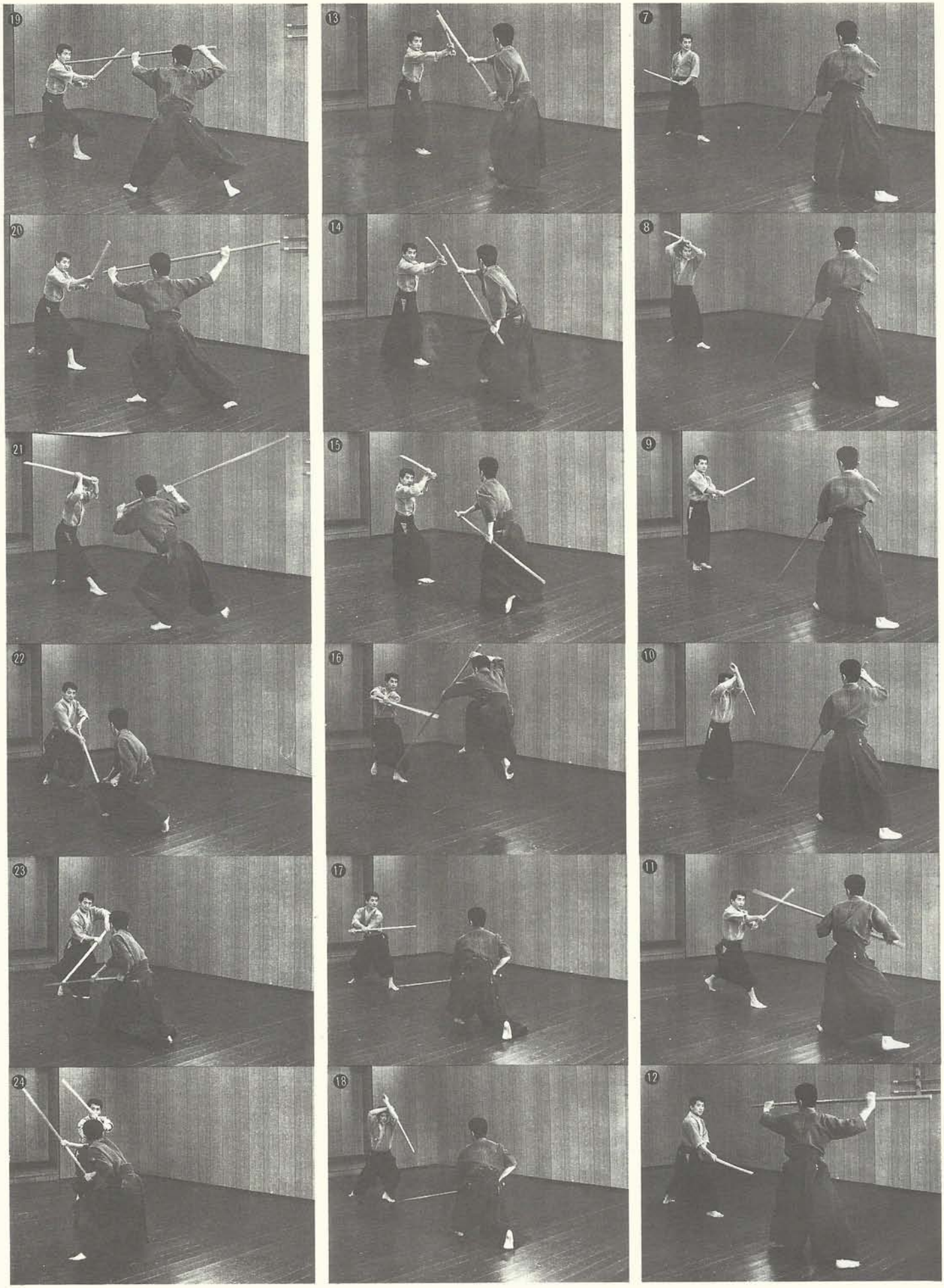
此方は再び手の内を返して棒を持ち替え、腰を入れて敵の裾を払う（⑳～㉒）。

敵がそれを下段に受け止め、さらに打ち込んでくるところを、此方は立ち上がりながら伏せ（㉓～㉕）、左肩口から打ち下ろす（㉖～㉘）。

敵はそれを頭上で受け止めつつ引き、〝巴〟を切って〝清眼〟に戻し、此方は棒を水平にし（㉘～㉙）、このあと静かに棒を立てて残心を示す。


19
13
7
20
14
8
21
15
9
22
16
10
23
17
11
24
18
12

突留之槍（つきとめのやり）

「槍術」六カ条より

敵（太刀）、此方（槍）ともに呼応して〝清眼〟から〝上段〟に静かに振りかぶる（①～②）。

此方は二歩進み出て敵の咽（のど）を突くが、敵は間合をはかりながら此方の動きに合わせてさがり、これを打ち落とす（③～⑤）。

此方は一歩さがって下段に構え、敵は上段（⑥～⑦）。此方その足で踏み込み膝を折って下段に突くと、さらに敵はさがりながら下段で受け止め（⑧～⑨）、すかさず前進して打ち込んでくるところを（⑩～⑭）、此方はその太刀を伏せ、突き身で勝つ（⑮～⑯）。

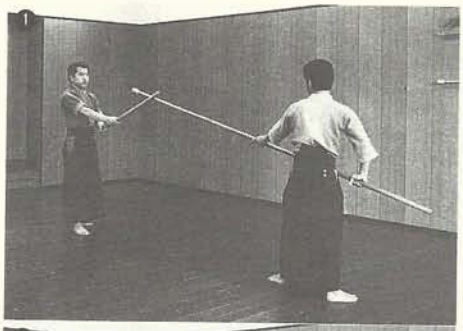
敵は〝巴〟に太刀を振りかぶり、もとの清眼に戻る（⑰～⑱）。

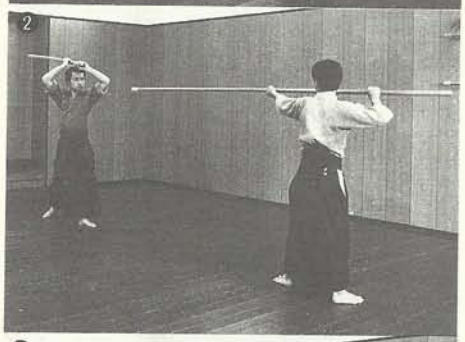
この形では、槍の勝ち口として最終的に太刀を伏せて突く、という説明ができるが、剣の立場からすれば、いかにして〝長物〟に対処するかというポイントが示されている。

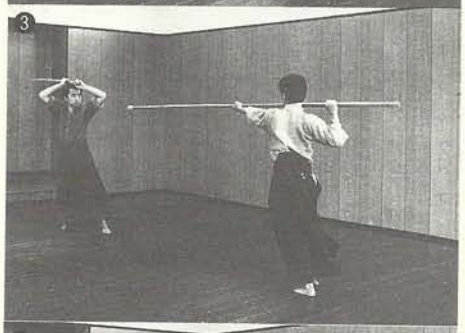
相手（この場合は槍）が両手を引きしぼり満身の力で突き出したところを、太刀はすばやく下段で受けるが、ここからがポイントである。槍に引く間を与えずに、つけ込むようにして相手の間に入るのである。

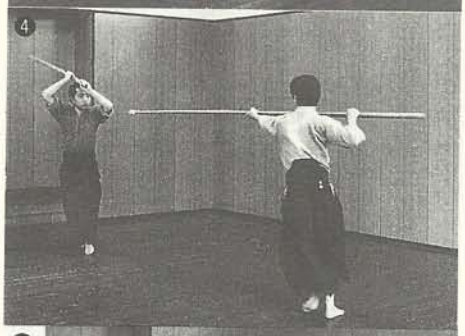
このとき、はしかかる、つまり槍の柄を刀身で支えるように、巻き返すようにしていなし、勝ちを制するわけである。

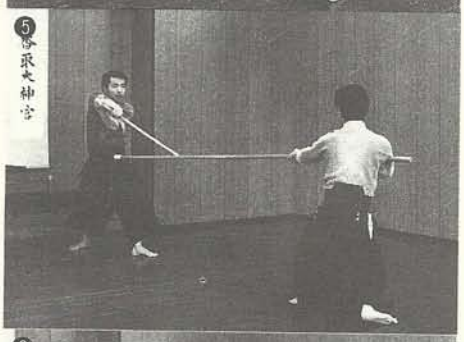
長物は懐（ふところ）に入られては、どうすることもできない。太刀が打ち込み、槍が押さえたところで、実質的に双方の力強い攻防が終わっているが、どちらの利とも受けとれるところに神道流の形の妙味がある。

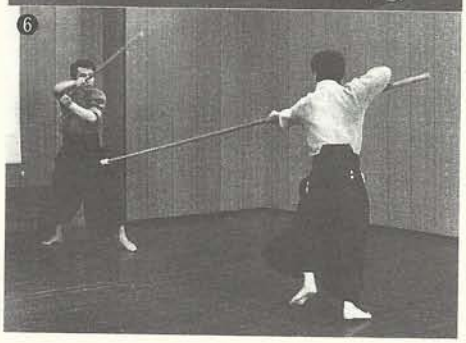












（技術指導用ビデオ）

剣道指導大系

全11巻

指導・解説　**作道正夫**

神崎　浩

（石田利也）

実　技　大阪体育大学剣道部

日本剣道形――3巻
初心者指導編――4巻
クラブ活動編――3巻
コーチング編――1巻

＊各巻 50～60分　10,000円

＊全巻御希望の方で分割払い
御希望の方は係まで！

内容の特長・説得力抜群

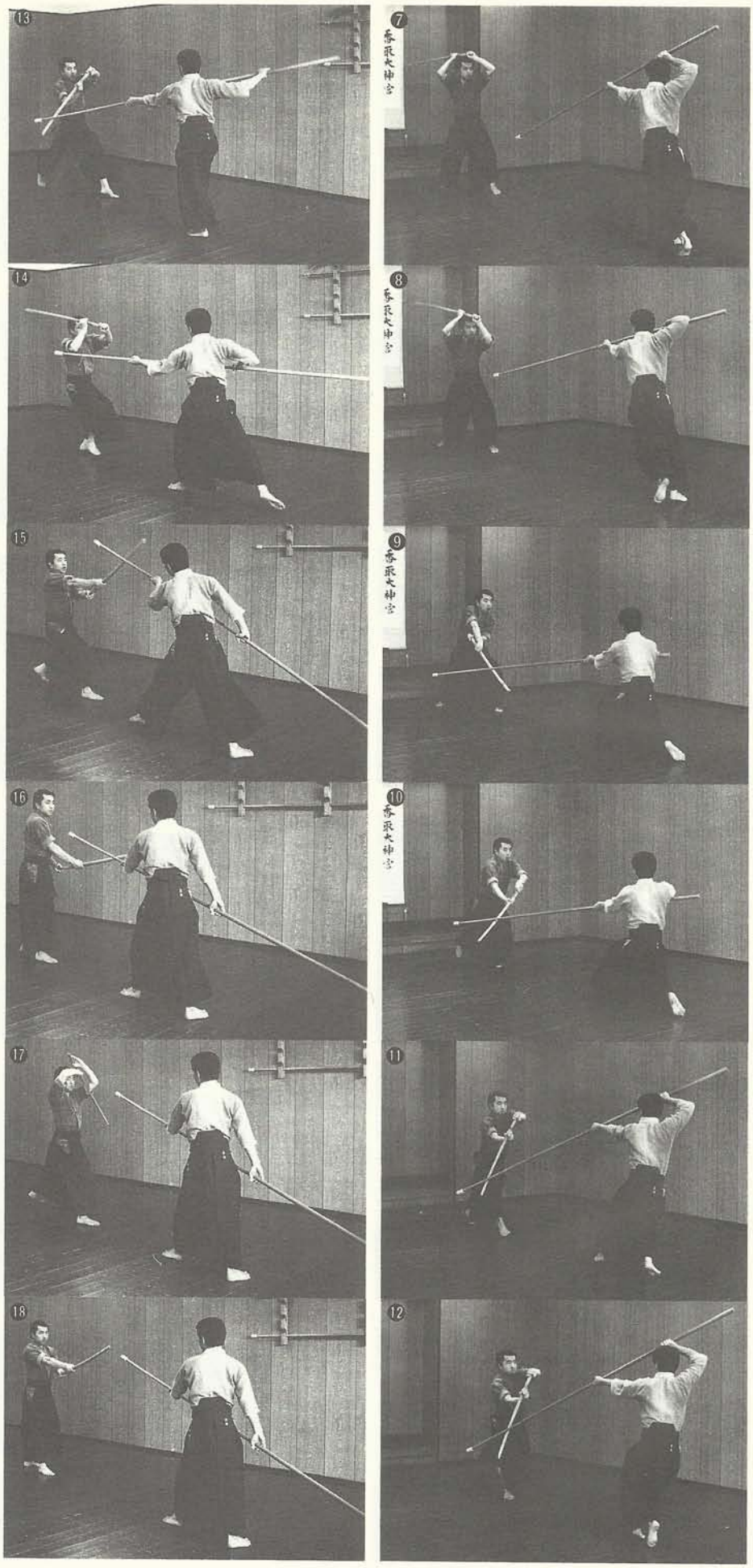
このテープは単に技の見本だけを見せているテープではなく、こういった場面、またこのような技には、どの様な稽古が必要かを堀り下げていって、何故こうなるのかをわかりやすく説明した画期的なビデオです。

お申し込み窓口

☎ 0722(23) 6133
0722(32) 1919

〒590 大阪府堺市南花田口町1丁1番21号

㈱ヘルツ



五津之長刀（いつつのなぎなた）

「薙刀術」四カ条より

此方は長刀を左下段②に構え、敵は太刀を〝捨の構え〟から上段に変化する（②～③）。

敵が振りかぶって牽制し、此方の面に打ち込んでくるところを④～⑤、此方はその太刀を押さえ⑥、そのまま前に摺り込み⑦、刃を返して胴を切り⑧、引いて長刀を立て、〝陰の構え〟となる⑨～⑩。

此方は長刀を持ち替え、左胴を切りにいき、⑪～⑫＝敵は太刀で受け）さらに面に変化する（⑬＝敵は太刀で受ける）。

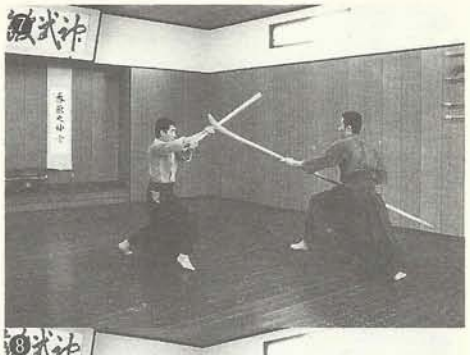
此方は〝冠り入身〟の下段（⑭）から切り上げると敵は下段で受け、すかさず此方の右腰に切り返してくる⑭～⑯。そこを此方は〝山廻り〟してかわしつつ敵の胴を払う（⑯～㉑）。

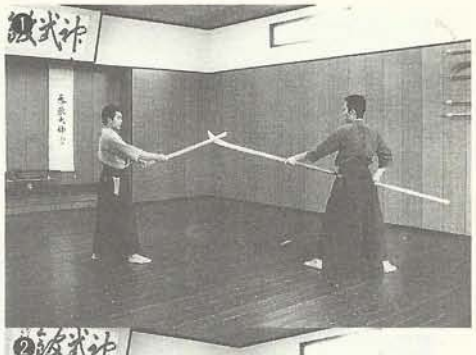
敵が上段から振り下ろしたあと、此方はその太刀を押さえ、さらに首、胴と切っていき㉒～㉓、敵が面にくるところを石突きで巻き取り、〝陰の構え〟に復す㉔～㉖。

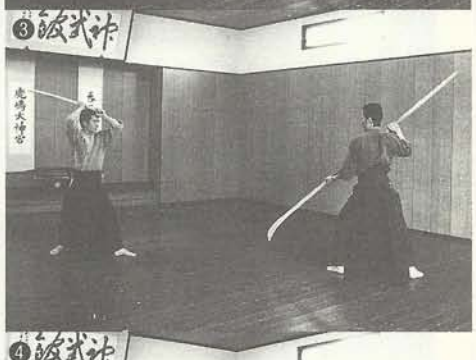
此方は敵の左胴を切り㉗～㉘、再び胴を切って敵の太刀を押さえると㉙～㉝、敵もその長刀を押さえるが㉝～㉞、そこから敵が面に打ち込もうとするところを此方は石突きで巻き取り㉟、〝陰の構〟となる（㊱～㊲）。

敵が此方の左首に切りかかるところを、此方は左足を引いて敵の小手を切り上げ（㊳～㊵）、袈裟に摺り上げる（㊶～㊷）。

薙刀の形でも、長刀と太刀、双方が勝つためのポイントがあり、〝崩し〟が隠されている。







武道と調和

居合着剣道形　通称染抜紋　ポリエステル100%

Mサ 38,000円
Lサ 39,000円
半ジバン・腰紐付

表示価格に消費税は含まれておりません。

050 紋入居合着（張付紋）
Mサ 18,000円
ポリエステル100%

060 ウール縞袴
21,000円

067 袴
067-正絹
068-麻
069-綿

600 ポリエステル居合着
高級仕立
13,000円
色／茶・グレー・紺・黒

025 手組紐
力紐 12,000円

015 武道羽織
表布地 ポリエステル レーヨン混紡
12,000円
色／紺・黒

601 袴ツムギ
19,000円

020 道々（ドウドウ）（四点入）（ソフトデニム綿100%）
Mサ 30,800円
Sサ 29,800円

330 ツムギ2点セット
Mサ 18,500円
Lサ 19,800円

光輝く
源氏羽織（子供用）
Mサ 2,800円
色／紺・水・ベージュ
綿100%

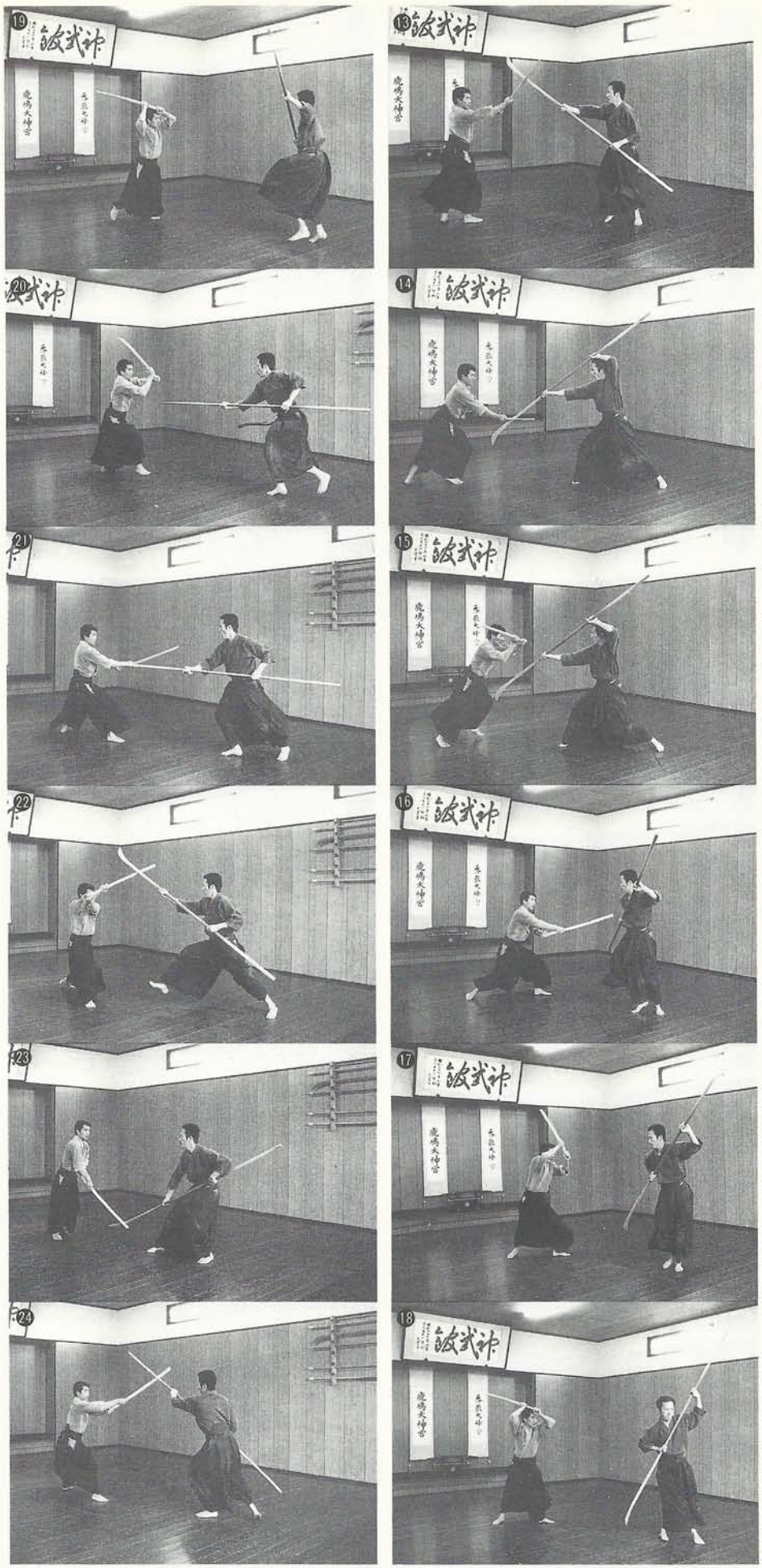
爽々 12,000円
綿100%

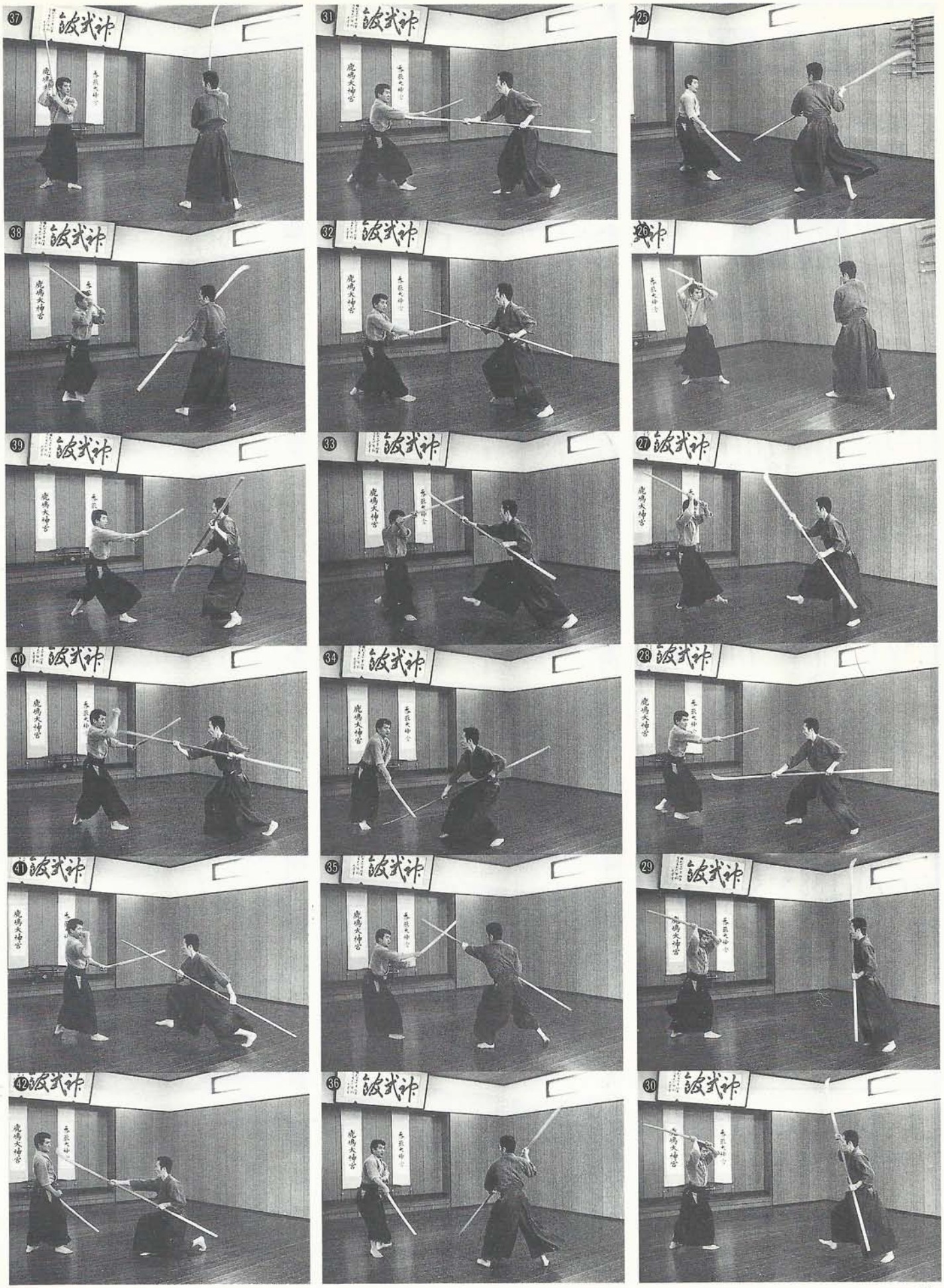
マルシン株式会社

〒604 京都市中京区壬生坊城町65-2
TEL 075(841)1523

●詳しくは、お近くの武道具店、又は電話、ハガキにてお問合せ下さい。

FAX 075(801)9080




37
31
25
38
32
26
39
33
27
40
34
28
41
35
29
42
36
30
鹿嶋大神宮